

実は私、
中大出身で

Vol.2

秋元康氏

作詞家

(1977年文学部入学)



僕に合った**自由な校風** 失敗こそ若さの**特権** もっと“**遠回り**”をしよう!

「実は私、中大出身で」の連載第2回では、作詞やテレビ番組の企画構成、アイドルグループのプロデュースなど、エンターテインメントの世界で幅広く活躍している秋元康氏(1977年文学部入学)に都内の事務所で話を伺った。秋元氏は「困難な壁や挫折に直面し、迷い、失敗する。それこそが若さの特権。何度でも間違っている」と語りかけ、「好奇心をもって、若いうちはもっと遠回り(寄り道)をしよう」と後輩たちにメッセージを送っている。

(聞き手 「HAKUMON Chuo」学生記者、木村結＝法学部3年、金岡千聖＝商学部3年)

(映像撮影 中央大学広報室・中央大学放送研究会学生スタッフ)



インタビュー動画は
こちらから
ご覧になれます

《東京都出身の秋元氏は、当時は男子校だった中央大学附属高校（小金井市）から中央大学に進学し、高校・大学時代にはすでに放送作家として頭角を現していた。高校2年生のとき、ふとしたきっかけでラジオ局で仕事をすることになり、その後の人生への大きな転機となる》

自由な雰囲気の附属高校 高校2年で放送作家として活躍

——小児ぜんそくで幼少期から小学生の頃は体があまり丈夫ではなかったと伺っています。ご自身で振り返ってみて、どのような子供でしたか

秋元氏 外に遊びに行くより、家で本を読んだりするタイプだったかもしれないですね。体が弱い、ぜんそくが出るというのもあったかもしれません。活発に外で野球をするとか、そういう子供ではなかった気がしますね。

——当時、将来の夢はありましたか

秋元氏 友達が漫画を描いていたら、「漫画家や漫画を描くことは面白いな」とか、小児ぜんそくだったから、「お医者さんの仕事は面白いな」とか、身近な人に子供の頃は影響を受けやすいですね。進学塾に通うようになって、そこの仲間たちが「将来、官僚になるんだ」などと、いろいろ教えてくれて「あー、そういうものなんだ」と思いました。僕は長男で兄や姉がいないので、そういった将来の進路の情報が少なかったのかもしれません。仲間たちは兄や姉がいたんでしょう。だから、そういうことも知っていたんだと思います。

——中央大学附属高校時代の思い出や記憶、そして高校時代から放送作家として活躍するようになったきっかけ、経緯を教えてください

秋元氏 高校はすごく自由でした。何よりもよかったのは大学の附属高校なので、雰囲気などが大学っぽいなよね。先生方もある種、生徒たちを大人扱いしてくれていた。僕にとってはとても良い高校でした。厳しく指導してくださる先生もいらっしゃいましたけどね。私服だったし、皆が自由に、当時はやっていたVANなどのいわゆるアイビー（米国のトラッドスタイルのファッション）の服を着たりしていました。食堂では、冷やし中華やカツカレーなどが人気でした。バレーボール部がすごく強かったという思い出もあります。

高校2年のときにラジオを聴いていて、「自分でも書けるのではないか」と思い、平家物語のパロディーのようなものを書いてニッポン放送に送ったら、「面白いから遊びに来い」と言われたのがきっかけで、放送作家という仕事を知るわけです。高2の冬くらいには、山口百恵さんのレギュラー番組の台本を書いていた。同学年の百恵さんはトップアイドルで、高校に行けば皆が「すごい百恵ちゃん、かわいい」とか、雑誌のグラビアを見て誰もが憧れるような存在でした。だけど、僕はラジオ局のスタジオで、目の前に百恵さんがいて、「このはがきを読んでもください」「この原稿を読んでもください」と渡していたので、ちょっと不思議な生活でしたよね。



中央大学附属高校のクラスメートと旅行に出かけた際のスナップ写真（前列中央が秋元氏）

「ああ、夢を見ていた」 時が止まり 17歳の夏に戻る

人生を振り返ると、17歳の夏のときに、コクヨの原稿用紙を買ってきて…、何かそれは理由があったわけでもない。ただ書けそうな気がしたから書いた。それで原稿を書いて、ニッポン放送に送りました。いま67歳ですけど、僕の中では、何かあの時からずっと（時が）止まったままなんですよ。いまでも「ああ、夢を見ていた」「放送作家になって、作詞家になった夢を見ていた」というふうに。ふとした時に、高校生の17歳の自分に戻るような気がするんですよ。

《大学1年生のときは駿河台キャンパスに通った。盛んだった学生運動が収束を迎えていた頃だった。ロックアウト（校地封鎖）、革命を訴える学生、アメリカのヒッピー文化（愛と平和、反戦などをスローガンとした当時の若者のムーブメント）に影響を受けた人たち…。さまざまな人々が行き交う活気にあふれた学生街で、多感な時期を過ごした》

駿河台の学生街の思い出 近代的で美しい多摩キャンパス

——大学在学中はちょうどキャンパスの多摩移転の時期とも重なっていましたが、駿河台時代を含め、どのような学生生活を送られていましたか

秋元氏 附属高校から中央大学と、自分に合った校風というのかな。息苦しさがないというのが一番で、楽しかったですよ。駿河台キャンパスの近くにおいしいカレー屋さん

があって、喫茶店と雀荘の3つを行き来していました。放送作家の仕事が忙しすぎて、授業中ずっと、テレビやラジオの台本を書いたりして…。うーん、不真面目ですね(笑い)。学生運動の本当に最後の頃だと思うけれど、時々ロックアウトになっていました。駿河台とその周りの学生街には、革命を訴える皆さんや、アメリカのヒッピーやフラワーチルドレンの影響を受けた人たちなど、本当に多種多様な学生たちがいて、でも、それを包括している大学という組織も自由で、世の中全体が面白かった記憶があるんですよね。八王子(多摩キャンパス)に校舎が移転してからは、電車でも、自分で車を運転しても通いました。それも面白かったですよ。建物(校舎)などがとても近代的な感覚でしたね、美しかったですし。当時は車で来る学生がほかにもいました。今でも付き合っているのは、やっぱり高校、大学の友達が一番多いですね。

——ご多忙な日々の中で、母校・中央大学、中央大学附属高校のことを意識することはありますか。

秋元氏 いま、どこも少子化とか、受験者数が減っているとか、いろいろあって、さまざまな大学が危機感をもって施策にあたっている中、わが中央大学は大丈夫かな、という心配はしています。

《若い人たちが困難な壁に直面したり、挫折したりしたとき、その場で立ち止まってしまうことが一番もったいないと、秋元氏は語る。「迷わず、立ち止まらず、右か左に動く。動いた先が行き止まりで、間違っていたら戻る。その戻る力が大事」「間違いや失敗は若さの特権」と、自身の経験を踏まえて、後輩たちに訴えかける》

超えられない壁や分岐点 右か左へ走る、間違いなら全力で戻る

——後輩の中大生、附属高校生を含む若者たちにメッセージをお願いします

秋元氏 壁や挫折。いろいろな障害に直面すると思うんだけど、そこで皆、迷うんだよね。恋愛の悩みでも、仕事の悩みでも、就職でも、学校でも、友人関係でも。でも、それはじっと考えていても何も始まらない。だから、壁に突き当たったときに右か左に移動しなさいと。それが間違いだったら、元のところに戻ってればいいし、間違いを改めればいい。一番損なのは、じっと考えて時間だけが過ぎてしまうこと。もったいないと思いますね。結局、右か左の2つの道があったら、どちらでもいいから全力で走る。行き止まりだったら、間違っていたら、戻ってくる。その体力こそが若さなわけです。年を取るほど大変だから、どちらかの道を選べなくなるんですよ。だから、それは若さの特権。あなたたちは何度間違えてもいいわけです。

——もし若い頃に戻れるとしたら、何かやっておきたいことはありますか

秋元氏 ないですね。若い頃に戻ったら大変だなんて。また同じだけ67年間、生きなきゃいけないと思うと大変ですから。あー、よかった、67歳で(笑い)。

《「好奇心こそが人生を決めてきた。面白いと思えることが僕には重要」「人間同士は運命でつながっていて、出会いたいと思っていると、どこかでつながっていくようにできている」—。クリエイティブな仕事に取り組む姿勢や、運命的ともいえる人々との出会いについて、秋元氏はこれまでのインタビューや講演で、そうした言葉で表してきた。作詞という仕事に向き合う中で大きな節目となった、歌手の美空ひばりさんとの縁、出会いについても尋ねた》

好奇心…なくなったら仕事をやめる 人と人を結ぶ縁や運

——創作のモチベーションとなる好奇心を保つ秘訣、長く第一線で活躍できる秘密はありますか

秋元氏 好奇心は保つものではありませんが、それがなくなったら仕事をやめようと思っています。好奇心って何だろう。「気づくこと」かな。皆さんの世代はもっと、遠回り(寄り道)をした方がいいと思うんだよね。多摩キャンパスに通学するにしても、モノレールの1つ手前や2つ手前の駅では普通は降りない。でも、手前の駅に何かがあるかもしれないという、面白そうだということを楽しまないと、単なる大学までの通学時間でしかないじゃないですか。

——美空ひばりさんに「川の流れるように」(ひばりさん最後のシングル曲、1989年1月発売)を提供された経緯やエピソードを教えてください

秋元氏 人と人は何かの縁で結ばれていて、もっと言うと、人だけではなくて、全てが縁とか運で結ばれているわけでしょう。美空ひばりさんのご縁は、「ひばりさんのような自分とは全然遠い距離にいる方の詞を書きたいな」と答えたところ、ひばりさんのプロダクションに伝わったことがきっかけです。縁を感じますね。その頃の僕は大学も中退して全てが中途半端で、「このままではメッキが剥がれるな。だから、勉強し直そう」と、ニューヨークに渡っていました。イースト・リバーの近くのコンドミニアムに住んでいて、「あー、この川も海につながって、日本につながっているんだろうな」と感じたりしていたように思います。

「川の流れるように」は先にメロディーがあって、「カフェ・ランターナ」というワシントンスクエア・パークの近くにあるカフェで、カセットテープの曲をヘッドホンで聴きながら、



中大生だった頃、高校時代からの友人とテニスに訪れた軽井沢で(左が秋元康氏)

歌詞を書きました。原稿用紙を広げてね。普通は（歌詞の）中身が決まって、サビなども決まって、最後にタイトルを考えるんだけど、「川の流れるように」だけは、ペンを持ったとき、1行目に「川の流れるように」と書いていたんですよ。理由はわからないんですが…。その後、いろいろなインタビューを受けて、だんだんと、その理由は、きっとイーストリバーを見ていたからということと、日本への望郷の念が重なっていたことなんだろうなと思っています。

《川の流れるように》は、「美空ひばりさんからの応援歌」をコンセプトに制作された。「みんな、それぞれいろいろな川があるけど、最後は同じ海にそそぐのよ」。秋元氏は、レコーディングの際の美空ひばりさんの言葉がいまも胸に残っているという

「とても良い詞ね」 ひばりさんの一言で「作詞家」に

美空ひばりさんは戦後、天才歌手として多くの日本人を勇気づけた人です。「ひばりさんが応援歌を歌ってくれたら、皆が元気になれるんじゃないか」というのがコンセプトでした。レコーディングのときに、ひばりさんが「この詞はとても良い詞ね」とおっしゃってくださったので、そのとき以来、「作詞家」という肩書きを使うようになったんです。ひばりさんは「確かに人生というのは、あの『川の流れるように』みたいなもので…。だけどね、秋元さん、みんな、それぞれいろいろな川があるけど、最後は同じ海にそそぐのよ」ともおっしゃった。そのときは深いことをおっしゃるなくらいに思ったんだけど、ひばりさんはそれからしばらくして亡くなってしまった。きっと、ある種、覚悟していた何かを持っていたのか…。歌謡界の女王となっても、「もう、みんな同じよ、最後は」というふうに思われていたのかなと。

——さまざまな方々と仕事に携わる中で、縁や運はどのように紡がれていったのでしょうか

秋元氏 放送作家や作詞家として売れても、続くわけがないというのが自分の中ではありましたよね。これが一生の仕事として、食べていけるとは思わないから、ずっとアルバイト感覚でした。ところが縁と運で、たとえば、あるテレビ番組が終わりかけると、違う番組の話が来たり、そこで出会った人と今度また番組を作ろうとか。そういうことが繰り返しながらってきたんだろうと思うんですよ。（美空ひばりさんとの出会いと同じように）点が線になり、面になってきたということなんだと思います。

売れることは“支持”の証し 「正解のない仕事」

——最近、この曲は素晴らしいと感じたアーティストはいらっしゃいますか

秋元氏 たくさんいますよ。たとえば、RADWIMPSの野田洋次郎さん、米津玄師さんにしても、King Gnu、ヒゲダン（Official髭男dism）にしても、売れるというのは結果



秋元康氏

あきもと・やすし。1958年生まれ、東京都目黒区出身。中央大学附属高校を卒業後、1977年中央大学文学部史学科入学、1982年中退。高校在学中から放送作家として頭角を現し、以来「ザ・ベストテン」など数多くの番組構成を手がける。2008年日本作詩大賞を受賞。作詞した楽曲は日本レコード大賞を4回受賞（2011、2012、2017、2018年）。2012年日本レコード大賞作詩賞を受賞。このほか、テレビドラマ制作、映画監督、CMやゲームの企画など幅広いジャンルで活躍している。2015年には作詞したシングルの総売上枚数が前人未達の1億枚を超えた。2022年紫綬褒章受章。

でしかなく、売れるためにやっているわけではないけれど、売れるということはそれだけの支持を得ているわけだから。そういう意味では売れる理由が分かるよね。素晴らしい作品が多いなと思っています。

——作詞やプロデュース以外の仕事をされているご自身を想像することはありますか

秋元氏 あまりないですね。ただ、アートや建築が好きで、相通ずるところは「正解のないもの」が好きだということ。正解があるものというのは、自分にとってなかなか整合性が取れない。「何だかもう、これでもいいじゃないか」と思ってしまうからね。そういう意味では、ほかの人生を歩んでいたとしても、正解のない仕事をしているんじゃないかなと思いますけれどね。でも、言ってみたら、どんな職業でも正解はないよね、きっと。人生そのものが正解がないのかもしれないけれどね。

——これまで手がけたプロジェクトで満足できたものはありますか

秋元氏 たぶん、ないから次のことをやるんだと思うんですよね。満足したものを作れたら、そこで満足してしまうんだから。「もっとできたはずなのに」というふうに思うから、違う題材や違うテーマで新しいことをやってみようと思うんじゃないかな。